



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現在のクロアチア語について
Author(s)	三谷, 恵子; Mitani, Keiko
Citation	スラヴ研究, 40, 75-96
Issue Date	1993
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5213
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113356.pdf



現在のクロアチア語について

三 谷 恵 子

0. ある言語が他の言語とは別の「独立した」言語とみなされるための要件は何か、という問題は言語学のみならず社会学や政治学の立場からも取り上げられる問題であろう。ここには、言語の実質的な構造例えば文法的特徴、音構造や表記の体系(文字、正書法など)などの、「どのような言語か」に関わる事柄のみならず、その言語の使用者の意識、言語が使用される社会の政治的・社会的性格もまた密接に関わる。政治的自律の獲得はしばしば、その領域内で使用される言語の「独立」をもたらす。政治や社会構造と密接に関わるがゆえにまた、言語の自律がその使用者集団の政治的、経済的自律の主張のための一つの象徴として、つまりは政治的手段として掲げられたりもする。

旧ユーゴ(以下では第二次大戦後の連邦国家ユーゴスラビアをこう呼ぶ)領内で91年より続いている悲惨な事態、特に92年春以降のボスニア・ヘルツェゴヴィナでの惨状はここで改めて言及するまでもなかろう。ここには旧体制の崩壊と新しい社会組織への移行ばかりでなく、これまで共同体を形成していた者同士の敵対という事態がある。本稿ではこうした社会の大きな変動がセルビア・クロアチア語にどのような変化を引き起こしているかを、クロアチア国内の事情に限定しながら見、社会と言語の関わりについての一考察としたい。

以下の議論は1.多極的言語polycentric languageと呼ばれるセルビア・クロアチア語の性格とセルビア・クロアチア語の変異体としてのクロアチア語の実際を示す;2.言語の名称とその統一的な規範の設定を巡る近年のクロアチア、セルビア間の対立を振り返りながら、完全に統一化された標準セルビア・クロアチア語が形成されず、多極性が保たれたことの意味を考察する;3.独立国家への移行、戦争という状況の中でクロアチア語が直面している問題(正書法と語彙)について検討する

といった順で進められる。

1. 多極的言語セルビア・クロアチア語とクロアチア語

1.1 標準セルビア・クロアチア語standardni srpskohrvatski jezikは、新シト方言⁽¹⁾を基体とし標準化された言語で、セルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ツルナゴラの各共和国で公用語službeni jezikとして行政、司法の諸機関、教育、公的通信(放送、出版)において制度的に使用されてきた。

標準セルビア・クロアチア語は、完全に統一された形式はなく、基本的にこの言語を主要言語とするセルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ツルナゴラの各共和国においてそれぞれの地域の言語的慣習に則って標準化された変異体(varijant; 英語ではvariantま

たはvariety)として実現される⁽²⁾。こうした複数の標準形を変異体として持つ言語は多極的言語polycentric languageと呼ばれる⁽³⁾。

現在セルビア・クロアチア語に幾つの標準形変異体を認めるかは微妙な問題であろう。ノヴィサド協定の中でも明記されているように、それぞれベオグラード、ザグレブをその中心とするセルビア、クロアチアの二つを変異体とする見方が長く優勢で、この場合これら二つの標準形によって標準セルビア・クロアチア語は二極化されると見られる。Bugarski (89)も指摘するように、ボスニア・ヘルツェゴビナで標準形とされているものはセルビア、クロアチア両変異体の混合的性格を呈しており、その意味では二つの極性の対立が中和されている。またツルナゴラの言語は、クロアチア語と共通するイエ方言(イエ方言については1.2)であるがほとんどの実質的特徴はセルビア語と共通する。そこでこれらは、明らかな極性を持った変異体とは認められず、しばしば標準的表現standardnojezični izrazi; standardsprachliche Ausdrückといったような曖昧な定義をあてはめられる⁽⁴⁾。

この問題もしかし、変異体という言葉の用いかたによって、また今日の社会の変貌と照合させるならば自ら変わってこよう⁽⁵⁾が、本論ではセルビア・クロアチア語全体の変異体の現われ方の問題には言及せずクロアチアとセルビアとの対比のみに関心を置き、多極性の特徴もクロアチアとセルビアという二つの極の関係において捉えるものとする。なお、以下の議論では、標準セルビア・クロアチア語のセルビア、クロアチアにおける変異体をセルビア語、クロアチア語と呼ぶことにする。この二つの呼び名は本稿に関するかぎりこの意味であると理解されたい。

クロス(67)では多極的言語は、同じ標準語、同じあるいはほぼ同一の方言から生じた変異体から成り、こうした変異体の違いは文字や綴り方などの外見上の、言語の集積体corpusそれ自体にとっては何ら問題とならないもので、それらが同一の言語a single languageであることを妨げるものではないとされる⁽⁶⁾。

とはいえ、冒頭で指摘したように、言語を他の言語と区別するものは言語の実体(文法構造、音韻組織など)のみならず、それを使用する者の意識やそれが使用される社会の性格である。次節で検証するように、クロアチア語とセルビア語との関係で重要なのは言語の実質的な違いよりは、その使用者の意識、またその背後にある政治的力関係であろう。がこの問題は次節で論じるとしてまず、多極的言語の変異体であるクロアチア語の特徴をまとめておきたい。

1.2 多極性の特徴とクロアチア語の極性。

多極的言語の特徴は、言語の実質的な総体は共通しながらある特定の項目において差異的特徴が極性をもって現われる点にある。セルビア・クロアチア語においては音韻組織、文法構造、造語法、音声式正書法(正書法については3節で取り上げる)、語彙の大部分が共通している。そこで共通部分を除いた、極性の現われる部分に注目し、以下に若干の例を挙げて示す。なお、以下でキリル文字で表記したものはセルビア語、ラテン文字で表記したものはクロアチア語とする。

セルビア・クロアチア語における極性は主として次の4点にまとめられよう：

1. 文字の違い(キリル文字とラテン文字)。

2. エ方言ekavski(セルビア語)とイエ方言ijekavski(クロアチア語)の呼び名ともなっている共通スラヴ語の*ě(ъ)起源の母音の発音ならびに表記。eとije/jeの対応の原則は、現在エ方言で長母音のēとなっていて*ěがイエ方言では二音節のije、また現在エ方言で短母音のeが一音節のjeになる: млеко - mlijeko, две - dvije; ветар - vjetar, видети - vidjeti。ただし実際にはこの原則に対応しないケースが多い⁽⁷⁾。また、セルビア・クロアチア語では語末のlはしばしばoとなる⁽⁸⁾が、イエ方言ではlと交替したoの前のje, ije (< *ě) はiとなるので、形容詞бео (< *бел. '白い'. 女性形 бела) に対し同じ形容詞が bio (女性形 bijela)。また同じ規則から、不定形語尾-ти/-tiの前がエ方言でe, イエ方言でjeである動詞の完了分詞(-l分詞)単数男性形はセルビア語で-ео, クロアチア語で-ioとなる: разумети(理解する)から разумео (< *разумел. 女性形 разумела) に対し razumjeti から razumio (女性形 razumjela), волети(愛する)から волео に対し voljeti から volio。

3. 若干の文法的特徴。

(1) хтети/htjetiの短縮形を助動詞とした未来時称の表記法: ех. Биће боље に対して Bit će bolje (良くなるさ)。

(2) да-構文の使用と不定形の使用。ех. Ја могу да кажем... に対し Ja mogu kazati ((私)はこう言うことができます...); Нећу да га видим に対して Neću ga vidjeti (彼に会わないつもりだ)。

4. 語彙的違い。

セルビア語とクロアチア語の違いの中で最も目につきやすいのは語彙的な違いである。二つの変異体の語彙についてДмитријева(88)は新聞記事の用語をもとに詳しい分析をおこなっている⁽⁹⁾。そこでこの研究を参照しつつ、論者の収拾した資料を加えて語彙に認められる極性をまとめた。語彙的極性は、

(1) ヴァリエントをなす語彙対の語彙的特徴

(2) ヴァリエントの現われ方

の二つの面から特徴づけられよう。

(1) 語彙対の語彙的特徴: ヴァリエントをなす語彙対は a. 音構成の異なる二重語 doublet、b. 造語法の違いに因るペア、c. 同義語となる異なる語彙のペア、の3通りに分けることができる。

a. 音構成の異なる二重語⁽¹⁰⁾

a1. 語を構成する母音が異なるもの。ех. тачан - toćan (正確な、正しい)⁽¹¹⁾; милион-милјун; словенски - slavenski (スラヴの。クロアチアで slovenski と言えばスロヴェニアの(= словеначки)の意)など。

a2. 子音が異なる二重語。

кафа- kava, кувати - kuhati (料理する), сречан - sretan (幸福な)など。

b. 造語法の違い。

b1. 動詞の派生語尾: -сати/ -овати に対する -рати. ех.: паркисати - parkirati (駐車する), фалсификовати - falsificirati (偽造する):

...Јапан се, међутим, засад уздржава од признавања друге две републике које су се такође декларисале као независне Босна и Херцеговина и Македонија.

(Политика, 18.03.1992)

日本はしかし、独立ボスニア・ヘルツェゴビナと独立マケドニアを宣言した、他の二つの共和国の承認は当面据え置いている。

...jer država treba samo regulirati odne 〽ene procese, a ne diktirati gospodarski život. Treba što prije mobilizirati stvaralačku energiju ljudi. (Večernji list, 05.03.1992)

というのも国家は特定のプロセスを統制すればよいので経済生活を支配する必要はないからだ。可能なかぎり早く人々の創造的活力を動員する必要がある。

b2. 名詞の女性形を派生する語尾。ex. студенткиња (女子学生) に対し studentica, колегиница (女性の同僚) に対し kolegica など。

c. 異なる語彙が同義語の関係になる。

この対は、語源的関係から、双方共にスラヴあるいは南スラヴ語起源のもの、一方が外来語で他方がスラヴ起源の語、一方が外来語で他方は翻訳借用語、双方共に外来語、などに下位区分できる。

c1) ともにスラヴ起源の語: острво - otok (島), отаџбина - domovina (祖国、故郷), век - stoljeće (世紀)。

c2) 一方が外来語、一方がスラヴ起源の語: хиљада (grč.) - tisuća (千), музика - glazba (音楽), систем - sustav (<チェコ語 soustava より)。

c3) 一方が外来語、一方が翻訳借用: универзитет - sveučilište (大学), фудбал - nogomet (サッカー), географија - zemljopis (地理), пензија - mirovina (年金)。

c4) 起源の異なる外来語: маказе (トルコ) - škare (独) (鋏), हेбе (トルコ, アラビア) - deka (独) (毛布)。

(2) 極性とヴァリアントの現われ方の関係。

二極間にヴァリアントが現われる場合、以下のようなタイプが考えられる(同じ概念、意味を表す語彙ヴァリアントを V1、V2... と表す)。

タイプ1: [V1]—[V2]

ヴァリアント V1 と V2 が両極に分裂している。

タイプ2: [V1]—[V2/V1]

V1 は一方の極に特に優勢だが他方の極でも用いられる。

タイプ3: [V1/V2]—[V1/V3]

双方の極に共通の語彙 V1 があり、同時にそれぞれ極性を持つ V2、V3 が併用される。

タイプ4: [V1/V2]—[V2/V1]

V1、V2 が共に両極で用いられる。ただし、その使用頻度に差が見られる。

実際に上記(1)に指摘した語彙対のどれがどのタイプであるか、という問題になると解答は容易ではない。少なくともこれまでのセルビア・クロアチア語の実情からいえば、双方のヴァリアントが程度の差こそあれ互いに混在しているというのが現実であり、その意味ではほとんどの語彙が上記のタイプ4に属すると言えよう。そこでタイプ分けは頻度の問題、あるいは使

用者がどの程度「自分達の言葉」「あちらの言葉」といった意識を持っているか、という心理的な問題となろう。現在クロアチアではヴァリアントの極性をなるべくタイプ1に近づけようとしている傾向が明白だが、それは次節の問題として、ここではДмитријеваのタイプ分け⁽¹²⁾から典型的と思われる若干の例を参考に示しておく。

タイプ1: 前記(1)のaおよびb。またcに属する幾つかの語彙(ex. фудбал - nogomet, ostrvo - otok, университет - sveučilište)。

タイプ2-1: セルビアがV1に対しクロアチアがV2/V1: музика - glazba/muzika, адвокат - odvjetnik/advokat, систем - sustav/sistem。

タイプ2-2: クロアチアがV1に対しセルビアがV2/V1: plin (ガス) - гас/плин。

タイプ3: V2にпозориште, V3にkazališteに対しV1にteatr。

タイプ4: V1にвек - V2にstoljeće, 同様にпартија - stranka (政党)

2. 多極性の意味と対立の歴史。

2.1. 1.2で示したように、セルビア語とクロアチア語の違いは言語学的には、少なくとも文法構造などを問題とする言語学の領域からすればそうたいしたものではない。そこで、この瑣末ともいえるような差異が統一されず、多極性が保たれたことの意味を考えてみたい。

言語の変化には二つの流れがある。即ち、民族の移動や異言語文化との接触、社会形態の変化、地域的隔絶、政治や経済構造の変化、通信・交通手段の変容など様々な要因によって、複数の言語あるいは変異体が統合され、一つの統一された標準形を中心とするまとまった単一の言語が形成されていく過程と、反対に単一の言語から別の言語が、あるいは一つのコイナーから別々の言語、異なる標準語が形成されていく過程で、前者は収束convergence、後者は分岐divergenceと呼ばれる。

旧ユーゴ地域には前世紀以来、この二つの流れが常に対立しながら存在していた。全体の流れとして、19世紀に起こった南スラブ人の政治的独立と独立国家形成を目指す運動の中での言語改革、今世紀の連合国家成立以降のユーゴスラヴィアにおけるセルビア・クロアチア語の標準化の過程は収束の方向へ向かうものであり、この中でセルビア・クロアチア語は文法体系と正書法の統一を果たした。この範囲において収束の過程は成功だったといえよう。

一方この収束に対して、あくまでも言語的差異を強調し独自性を維持しようとする態度がクロアチア内部に一貫してあった。クロスも「より小さな言語集団が、彼らにとって伝統的な言語を、より適応可能で利用しやすい形にするような計画的統合化と拡張という手段を用いて保持し、また同化に抵抗する、という傾向もしばしば見ることができる」と指摘している⁽¹³⁾ように、一つの社会共同体、政治単位の中で、様々な社会的要請(公的通信の効率性など)から言語が単一の標準形へと収束していくのが一つの必然的な傾向とすると、同時にこの収束に対し、あらゆる不都合や非合理性にも関わらず社会の中の特定の集団が言語的独自性を保とうとするのもまた、一つの事実である。この相対する二つの力の存在が結局、セルビア・クロアチア語の多極性を作りだし、それを今日に至るまで維持してきたと見ることができる。

言語的収束-分岐はしばしば人為的に行なわれ、その社会の諸状況、とくに政治、イデオロギーなどがこれと密接に関わるが、ユーゴにおいても上述した様な、戦前は連合、戦後は連邦

全体としての言語的収束、これに抵抗するクロアチア語の潜在的分岐という対立の図式はそのまま政治上の議論、つまり図式的な言い方ではあるが、統一主義対分離主義、中央集権制対共和国自治の拡大、連邦中央集権化＝セルビア覇権主義対共和国自治主義＝クロアチア民族主義、という連邦体制内における対立の中の一要素、もしくはその象徴として政治の場で議論されてきた。

この政治的、経済的対立の象徴と化した言語的対立の問題は、収束の反作用、内在的な分岐の力としてのクロアチア語の独自性の主張が、クロアチア国内では改めて国内の非クロアチア系民族(特にセルビア人)の言語のクロアチア語への収束-統合化の力となる、というリカーシヴな性格を持っていたがゆえに複雑さを増し、「クロアチア国内のセルビア人のクロアチア化」とセルビアが非難する状況を生じる、という点で一層先鋭化されてきた。

2.2. ではセルビア・クロアチア語の収束と分岐はどのような実体であったか。

一つの政治的単位、国家などで、その政治的中心地(多くの場合首都)で使用される変異体が標準語のステータスを獲得する例が珍しくないように、まず収束は簡単には、標準セルビア・クロアチア語のセルビア変異体への接近と方向付けることができる。旧ユーゴでは、連邦国家全体の公用語が唯一に定められるということにはなかったが、実質的席次⁽¹⁴⁾という面から考えれば、セルビア語の社会機能上の優越性は明かであった。つまり連邦政府の中枢機関がベオグラードにあること、連邦レベルの議会やTANJUG、ユーゴ連邦軍JNAの指揮などに広くセルビア語が使用されていたなどの事実があり、これらはまた、多言語国家ユーゴの中でセルビア語がリング・フランカの役割を果たしていたことを意味してもいる⁽¹⁵⁾。

これに対する反作用としてのクロアチアの立場は、言語の名称、語彙や表記の上で独自性を保持しようとする姿勢に顕著に現われた。

旧ユーゴの中で、最も格好の政治的議論になったのはクロアチアの「クロアチア文章語 *hrvatski književni jezik*」と言う名称に固執する態度であった。

文章語 *književni jezik* は今日のセルビア・クロアチア語においては標準語 *standardni jezik* とほぼ同義で使われることが多い(ノヴィサド協定の中でもこの語が標準語の意味で使用された)。「文章語」「標準語」などの用語の使われ方は様々で、ロシア語では広い意味で規範的言語を指して *литературный язык* が使用されるが、英語で *literary language* と言えば一般的な意味で、文芸や学術に使用される言語の意味でよく用いられる⁽¹⁶⁾。セルビア・クロアチア語圏では「文章語」と「標準語」は上述したように多くの場合同義的に使用されてきたが、この二つの用語の持つ意味合いは同じではない。それは単に「文章語」は古くから使用されていたのに対し「標準語」という用語は最近のものである、というような新旧の違いのみにとどまらない。セルビア・クロアチア語の「文章語」の概念は民衆の口話体に基礎を置きながら文学などの歴史的伝統の中で築かれ規範化された「手本となるべき」言語をさすものと理解され⁽¹⁷⁾、この規範性は必然的に伝統、文化などの価値概念と結び付く。「標準語」は同じように社会の規範化された言語を指しながら、かならずしも歴史的伝統などのニュアンスを含まない。

ここにクロアチアがクロアチア文章語という名称を主張する意図、そして同時に語彙、表記においてクロアチア語の独自性を保持しようとする理由、つまりはセルビアとは違う歴史的伝統を持つのだという民族心理学的な要因が伺える：「(クロアチア文章語という名称は)クロア

チアの文化歴史的自立性がよりどころとするもの」；「総ての南スラヴ民族の中で、クロアチアは、最も長く最も豊かな文章語の伝統を、生きた民衆の諸方言の基盤の上に築いてきた。クロアチア人にとっては言語は民族の独自性を保つための最も重要な手段の一つであり…民族のアイデンティティーを形成するものであった。それゆえに、クロアチア共和国内のクロアチア人の間では(...)法的に定められた名称のほかに、クロアチア語hrvatski jezikという呼び名が慣習的に用いられる」⁽¹⁸⁾。

これと連動して、収束の動きつまり「標準語＝セルビア語」という傾向に対する反発があり、さらに第二次大戦後のユーゴではクロアチア＝ウスタシャ、クロアチアと名のつくものは悪いものという連想が明に暗にクロアチアの権利を制限してきた、というクロアチア側の不満があった。こうしたクロアチア側不満は「50頁ほどのセルビア中世文学に関する章の中で、セルビアという形容詞は30、40回と用いられているのに、350頁に渡るクロアチア文学史の記述の中では、「我が国の」「古い」あるいはドブロヴニク、スラヴ、ユーゴの、といった表現はあっても、「クロアチア」という形容詞はただの一つもない」⁽¹⁹⁾、「マティツァ・フルヴァツカは、民族がその名称と言語を使用する権利があることを示したのです。あの時(「クロアチアの春」の運動の当時)要求されたのは、文化、精神的財産についての決定に関してクロアチアにもっと自主的な権利が与えられるべきだということ、クロアチアは、中央政府から強いられた匿名性anonimnostと地方性provincijalnostから抜け出さなければならない、ということでした。」⁽²⁰⁾といった言明に端的に表されている。

2.3. この独自の名称に固執する態度、そしてクロアチア語の独自性を強調する姿勢は「クロアチア分離主義」「民族主義」の象徴として連邦中央ならびにセルビアから批判されてきた。

クロアチア語の分岐の動きが政治社会的現象の中で戦後最初に表面化したのは67年のマティツァ・フルヴァツカによる「宣言」以降、71年の12月に最終的にティトー、カルデリらの中央指導部によって民族主義、反連邦主義として糾弾されとりあえず終結するクロアチア民族主義の動きの中であった。

60年代にユーゴ各共和国では、それぞれの民族が自治の拡大などを要求する動きが目だってきた。その中で生じたクロアチア民族主義は、伝統的な民族意識を下地に共和国自治権の拡大、市場の開放、資本の中央統制の廃止(「ダルマチアの外貨をセルビアが搾取している」)など新たな社会の制度化を要求した、政治・社会的現象であった。この動き全体の中で、戦後「ウスタシャの言葉」「ウスタシャの歴史」などとされ、公にすることが許されなかった様々なことから(歴史、文学、「クロアチア文章語」の名称など)を復権させようという文化的な要求も重要なモーメントとなった。

1967年3月のマティツァ・フルヴァツカによる「クロアチア文章語の地位と名称に関する宣言 Deklaracija o položaju i nazivu hrvatskoga književnog jezika」はこの時期のクロアチア語を巡る動きのなかで中核をなすものとなった。この宣言ではセルビア語、スロヴェニア語、マケドニア語、クロアチア語を同等の標準語(宣言の中の用語は「文章語」として承認し憲法に明記すること、クロアチア内では「クロアチア文章語」を公用語と定め、公的機関、教育、放送などにおいてこの言葉と名称が一貫して用いられるよう制度化することが要求された。また、ノヴィサド協定でうたわれている平等性は建前のことで、実際にはセルビア語が連邦の事

実上の公用語となっており、この事実をもってセルビア語を「国家語」にしようという統合化の意図があると批判された⁽²¹⁾。

67年の宣言の内容の妥当性はともかく、これが政治的な文脈の中に位置づけられたことは、当時の連邦の指導者カルデリがこの宣言を「政治的襲撃politički juriš」と呼んだ⁽²²⁾ことから伺える。

実際、言語問題が常に政治化されてきた状況について、社会言語学者のŠkiljanは次のように指摘している：「この言葉あるいはその変異体をどう呼ぶかといった問題は『最も政治的な』問題であって、社会言語学的には周辺的な事柄なのである。(…)この問題が議論される場においては、まずこれが言語学的レベルの事柄ではないこと、そこでおきているのは政治的、イデオロギー的、経済的利害対立であることを指摘する必要がある⁽²³⁾。」

71年11月のザグレブ大学の大規模な学生デモの後、翌72年からクロアチア主義的傾向の雑誌、研究機関に対する統制が強化され、「クロアチアの春」は表面的には終結する。

次に言語を巡る議論が表面化するのには、旧ユーゴが社会的、経済的矛盾を露呈して連邦体制そのものへの危機感が高まり始める80年代後半であった。80年代後半から起こってくるクロアチア民族主義は、20年前の再現のように、連邦中央集権化への反発、市場の解放、共和国自治の拡大、といったスローガンを掲げており、同時に伝統的な民族主義の復活という面をもっていた。ただ今回は、国内のより深刻な経済問題、ペレストロイカの風が引き起こした東欧民主革命の機運、旧共産主義体制の限界、新しい世界構造やEC統合、技術革新時代の到来など20年前とは異なる世界情勢への対応を抱えており、20年前とは比較にならない、より切迫した危機感を含んでいた。

そうした中で、クロアチアにおいてふたたび言語の問題(名称、クロアチア語の標準化の問題)が取りざたされるようになる。86年にクロアチアではクロアチア-セルビア語正書法ハンドブック、クロアチア文章語造語法、そしてクロアチア文章語統語論の三点が相次いで刊行され⁽²⁴⁾、これらは、クロアチアが独自の文法書、正書法辞典を出したという点で、また造語法辞典と文法は「クロアチア文章語」の名称を表題とすることから、またしても政治の場で議論され、セルビア側から非難された⁽²⁵⁾。

2.4. いまここで改めて、セルビア・クロアチア語の多極性が保持されたのはなぜか、という疑問を掲げれば、これに対する答えは同時に、なぜ上述したような「クロアチア文章語」の主張は許されなかったのか、またなぜ言語の問題が政治の問題となったのか、という疑問に対する答えでもあろう。

論者は政治学や社会学の専門ではないので、社会主義理念との関わりの中での民族主義の克服といった高度なレベルでこうした問題を考察する力はない。論者に考えられるのはただ以下のことである：ティト体制下の連邦国家では、権利の平等ravnopravnostという原則があった。この原則は、複雑な民族構成からなり、様々な歴史的、宗教的、あるいは経済的利害対立を内包する国家においては、民族間のバランスをとる理念的支柱であった。この権利の平等はセルビア・クロアチア語に関しては「セルビア人、クロアチア人、ツルナゴーラ人の言語は一つの言語」で「言語の名称には、公的には常に(セルビア、クロアチアの)双方の名称を掲げなければならない」⁽²⁶⁾という形で表現された(ボスニアのムスリム人はどうなるのかという問

題はここでは差し置かなければなるまい)。こうした原則からすれば、クロアチア文章語という単一名称は連邦制理念の原則である「権利の平等」に対する違反(「クロアチア内のセルビア人が、母語を自らの民族の名称で呼ぶ権利を奪う」)であり、連邦の利益に対する反逆であった。また、クロアチア文章語という独自の名称の使用を認めることは、クロアチア変異体の独立した標準語への「昇格」、セルビア語とは異なる言語の存在を認めることになりかねない。この言語的分岐の力はクロアチアの分離主義的な政策と切り離すことのできないもの、というよりは分離主義的な政策、民族主義的意識の象徴と見做され、連邦体制を維持・強化し、またクロアチア内のセルビア人の利益を守ることで全体の秩序の安定を計らねばならない連邦にとっては看過することの出来ないものだったのにちがいない。だが同時に、クロアチアが伝統的なものとして主張する言語の独自性、さらにはそれに依拠して主張する民族の独自性を、根拠のないものとして否定することも民族の平等の原則に対する違反となる。結局のところ、言語の本質的構造には影響しない範囲でそれぞれの言語的独自性を認めるという妥協の産物が「多極性」であったと言えよう。

だが権利の平等を建前として掲げながら、内部に抱える諸問題を議論として取り上げる以前に「反連邦」「反ティトー」などのラベルを張り、あるいは反対に「全体主義」「覇権主義」と一方的に決め付け、「同胞愛と統一bratstvo i jedinstvo」というスローガンとは裏腹にまことの政治的寛容性tolerancijaを育むことを怠り、十分なコミュニケーション行為を発達させなかったことが今日の旧ユーゴ地域の惨状を引き起こす一つの要因となったのは間違いない。

3. クロアチア語の現状 — 造成への道?

3.1. クロス(67)は隔絶言語Abstandsprache、造成言語Ausbauspracheというカテゴリーを指摘した⁽²⁷⁾。隔絶はある言語が周辺の言語と何らかの異なる言語的特徴を持ち、言語的自律性を保っている状態で、「通常の意味での一つの独立した言語」とされる。旧ユーゴにおけるセルビア・クロアチア語は全体として一つの隔絶言語であるし、また例えばスロヴェニア語、マケドニア語もこの状態に該当する。造成言語Ausbauspracheは、元来はある言語の一方言、あるいは極めて近親性の濃い同族言語の一つであったものが、一つの社会共同体(多くの場合国家)の言語として標準化された結果、もとの言語とは異なる特徴を有する形で出来上がった言語を言い、造成言語はもとの言語とは別の「隔絶言語」として認められるようになる。

さて、新政権の成立さらに独立国家形成以降、クロアチアでは、言語的分岐の動きが進んでいる。そこで今、このクロスの考え方を借用し、クロアチア語の目下の状況を造成言語形成に踏み出した段階と仮定して、ここに現われている性格、またどの様な問題が生じるかを考えてみたい。

造成言語はその形成の性格上多少なりとも政治・イデオロギー、国家あるいは政権担当者の立場の影響をうける。この時言語は、独立した政治・社会機構の枠組み形成の一つの道具、場合によっては国民のアイデンティティーの象徴として制度化される。この操作、あるいは制度化は、言語が同族のあるいは極めて類似性の高い他の(他国家の)言語と異なる何らかの差異的特徴を持つように進められるが、また同時に行政・司法、教育、公的通信、専門分野など、

社会のあらゆる領域で十分に機能するように方向付けられる必要がある。この目的の実現のために言語計画が設計され、実施される。

ファーガソン(62)の分析に依拠してハウゲン(66)は言語が未開の段階から標準化されるまでに必要な手続きを、規範の選別—範列化(codification)—造成(elaboration)として特徴づけた⁽²⁸⁾。

19世紀のセルビア・クロアチア語コイネー地域における言語改革者達の出発点がそうであったように、規範化された言語がない状況では言語計画は第一段階、すなわち標準語のモデルとすべき言語(方言)を選別することから出発する。第二段階の範列化では言語の規範が制度化される。つまり記述の体系(文字や正書法)、文法体系が規則化される。ここでは文法書や辞書の作成も必要な作業となる。この過程では形式の最小偏差minimal variation in form、つまり変異体の出現が最低限に制限される状態が理想とされる。第三の造成はつまり社会の様々な構成集団の言語として広い機能性を持つよう、語彙やスタイルが拡張される段階で、記述言語としての機能の拡充が重視される。ここでは社会的機能上の最大偏差maximal variation in function、即ち標準語があらゆる社会の分野、状況での使用に対応できるだけの適応力を持つことが目標となる。

規範上の最小偏差と社会機能上の最大偏差を実現する標準語を獲得することがコミュニケーションの効率性、言語文化の発達の上で極めて重要であるとすれば、反対に既存の言語の部分的・断片的改造によって新たな標準語を作ろうという試み、特に為政者や社会の特定の集団の利益のためだけにこうしたことが意図的に進められるような事態は上述したような標準語の理想の在り方とは程遠く、後々の標準語と言語文化の発達にマイナスの影響を及ぼすのみであろう。

3.2. さて、独立国家となったクロアチアでは、もはや堂々と自らの言語をクロアチア語と称することができる。言語学的な意味で、つまり「どの様な言語か」を問題とするならばセルビア・クロアチア語が一つの言語であり、クロアチアで使用されているものはセルビア・クロアチア語の一変異体であるという事実に対面変わりはなかろう。が同時に「民主政権」を掲げながら民族国家の樹立を目指し、セルビアと武力対決してきたクロアチア政府の支配の下で、クロアチア語をセルビア語とは別の言語としようとする意図的な動きは明かに進んでいるように思われる。ここに、言語の社会機能上の変化が実質的变化を引き起こすという実例を見ることができる。このことをここ1-2年の間に言語に関して生じた現象から表記法(正書法)の問題と、語彙の操作という二点を選んで検証し、その問題点を考えてみたい。

3.2.1. 語根式正書法korijenski pravopisの復活?

言語の標準化、あるいは上記のハウゲンの言語計画に添ってみるならばその第二段階においては正書法の設定が一つの重要な要素となる。

セルビア・クロアチア語では、19世紀のヴーク・カラジッチの改革の成果を取り入れて音声式正書法(fonetski pravopis)が使用されてきた⁽²⁹⁾(セルビアでは1868より、クロアチアでは1892より)。これは表記体系における収束であり、ekavski, ijekavskiという発音上の違いをそのまま反映させながら、標準語の正書法としてセルビア・クロアチア語圏社会に受け入れられ、成果をあげた。

音声式正書法では発音通りに表記するのが原則であるから例えばsudac(審判、裁判官)の単数生格はsuca(*sudca)となり、težak(重い)の女性形はteška(*težka)となる。

クロアチアで音声式表記が採用されるのは19世紀末からだが、それ以前、さらに部分的には今世紀初頭まではこれとは異なる様々な正書法が用いられてきた。その中でしばしば議論に上るのが語根式正書法korijenski pravopis、形態音韻的morfonološki、あるいは語源式etimološki正書法とよばれるもので、これらの正書法の音声式正書法方と最も異なる特徴は、sudac - sudca, težak - teškaのように形態素の特徴が表記上残される点にある。

正書法の歴史はどの言語でも多少なりとも紆余曲折を経ているものだが、クロアチアにおける正書法の規範の歴史を簡単に振り返ると、政権や社会体制が変わる毎に正書法の規範あるいは手本が変わってきたことがわかる。(年表参照)

年表から読み取ることのできる簡単な歴史からも解かるように、語根式正書法が最後に標準語の規範として設定されたのは1941のパヴェリッチ政権下の独立クロアチア国NDHにおいてであった。戦後はウスタシャの連想から語根式正書法は標準セルビア・クロアチア語の歴史から抹消され、'korijenski pravopis'という言葉自体「禁句」とされる時代が続く。

さて、クロアチアでHDZ政権が成立し、連邦解体が現実のものとなってきた90年9月、この政権党であるHDZの機関誌Glasnik(週刊)がある号の全面を語根式正書法で発行するという「事件」がおきた。この件について1990年10月2日付けDanasは「政権党であるHDZの機関誌が語根式正書法を用いたことは少なからぬ意味をもつように思われる。これは正書法を変えようという政府の意図の現われだろうか」と疑問を投じている。同誌によれば当時の教育文化相パヴレティッチ大臣は「正書法の改正に今すぐ着手するつもりはない。まず、幾種類かの正書法(辞典)が現われて選択の余地が生まれてから」と早急な決定を避けてはいるものの、正書法の改正を否定してはいない。

Glasnikの語根式正書法はさしあたりこの一号だけで、次号からは従来の正書法に戻ったのだが、クロアチアでは91年、86年のAnić-Silićの正書法ハンドブックPravopisni priručnikと並んで71年のBabić-Finka-Mogušのクロアチア語正書法辞典Hrvatski Pravopisが、さらに92年にはNDH時代のクロアチア語語根式正書法Hrvatski Krijenski Pravopisが再版されており、正書法の規範の選択に幾つかの可能性を準備しているように見える。目下、語根式正書法に一挙に改正すべきだというラディカルな意見は主流ではないものの、音声式正書法、語根式正書法のそれぞれの長所を考慮したうえで、クロアチア語の正書法をクロアチア語の実情にあった、かつ永続的なものにするべく検討すべきだ、という主張はかなりみられる⁽³⁰⁾。

多くのスラヴ語がそうであるように、正書法に多少なりとも語根式、音声式の双方の特徴が取り入れられることは避けられない。現在の標準セルビア・クロアチア語の正書法はヴーク・カラジッチが「書くように話し話すとおりに書け」という原則に基づいて提唱した正書法に則って、可能なかぎり音声式正書法を実現したといわれるが、それでも語根式正書法の規則が完全に排除されているわけではない(たとえばjedanput(一度)は発音/jedampu/通りに*jedampuと表記されはしない)。一方、語根式正書法を正しく修得することの難しさについては、マレティッチ、ユリシッチなどが100年、50年以前にすでに指摘しており、また正書

法の全面的かつ急激な変革は社会全体に様々な混乱をもたらすであろう。いずれにせよ正書法の将来がどうなるかしばらくは予断を許さない状況にあると見られる。

3.2.2. 語彙について。

語彙の面で現在生じている「クロアチア化」は、排他的(排セルビア的)純粹主義、復古主義、新語の形成の3点に集約できる。そしてこうした現象は、新聞、放送の用語や出版の領域に顕著に現われている。この過程は、先の1.2で考察した語彙の上の極性の拡大として位置づけられようが、極性を強調し、1.2の(2)で示したヴァリアントの現われ方と言えばタイプ1を作りだそうとする意図が目につく。そうしたものを幾つか例示してみよう(1.2の場合同様、対比させるセルビア語はキリル文字で記す)。

(1)社会現象や政治、経済、軍事に関係する語彙。ex. zrakoplov (飛行機=авион), この派生形容詞 zrakoplovni (авионски); pučanstvo (住民、一般民=становништво, народ); gospodarstvo (経済=економија, привреда。ただしprivredaは平行的に使われている); serbijanski (セルビアの=српски)など。

(2)その他の一般語。ex. čimbenik (要因、動因=фактор), oporba (反対、対立意見=опозиција), uljudba (文化=цивилизација)など。

(3)機能語。ex. glede... (...に関して、の意の前置詞。同義的にはšto se tiče, u odnosu na što), u svezi (との関連で。これまではu veziが普通であった)。

次のVjesnikの記事は以上に示したような傾向を示す格好の例であろう：

U svezi s tim, poznat je temeljni stav bitnih međunarodnih čimbenika koji odriču mogućnost promjena državnih granica silom, bez pristanka svih strana, a Europska zajednica i niz zemalja svijeta jasno su se i pozitivno odredili glede priznanja Republike Hrvatske. [Vjesnik, 17. ož. 1992, p1.]

これに関連して、全会一致の賛成がなければ、強制的な国境変更の可能性は認めないという重要な国際的勢力の基本的立場は周知のことであり、また一方欧州共同体ならびに世界の諸国がクロアチア承認に関して明確かつ積極的な立場を示している。

(上例の中で下線を引いた部分が目下の「クロアチア的」語法。Europskaは従来のセルビア・クロアチア語の正書法ではEvropska。)

このように、語彙の差異の拡大現象は部分的にせよ着実に進んでいるように思われる。またマスコミに対する報道統制が強化された昨年夏以来、トウジマン大統領が一度使用した語をマスコミが直ちに真似る、などといった現象も起きているらしい。

ところで、ある言語の語彙レパートリーと辞書との関係を考えてみると、語彙レパートリーや語の用法などが辞書に反映される面と、辞書に掲載されているか否かによって言語の語彙的特徴が規定される面の双方向の作用があると言えよう。言語がある程度安定している場合には多く前者のケースが現われようが、言語(少なくとも標準語)が不安定な状態では後者のケースがしばしば起こる。ここでは辞書は標準語の規範を形成するための手引書の役割を果たすことになり、どのような辞書をどのような方針で作るかは言語の特徴を決定する大きな鍵となる。

91年以降にクロアチアでは新しく幾つかの辞書が刊行されている。無論辞書の制作は長期の仕事であり、これらの辞書自体は以前から準備されていたのであろうが、新体制になって初めて刊行されたという事実は、裏を返せば旧体制では許されない性格のものであったということでもある。

91年末にザグレブ大学のアーニッチ教授を中心とする執筆陣によるクロアチア辞典が出版された (Rječnik hrvatskoga jezika. Novi Liber, Zagreb, 1991)。一卷で語数は5万余語、見出しに引き続き、アクセント付きの変化形など必要な文法項目が記載され、とくに動詞では格支配や派生名詞の形が示されるなど、これまでのセルビア・クロアチア語の辞書にはなかった配慮が見られる。見だし項目の特徴として「これまで長く忘れられてきた」あるいは「(戦後) 禁じられて来た」語がエントリーされていることが挙げられるがこれについてアーニッチ教授は「我が国では第二次大戦中に使用された語やアルカイズムと受け取られる語は好ましくない、とする見方があった...語そのものは良くも悪くもないのであり、ことばの事実そのものを重視するのが大切だと考える」と述べている⁽³¹⁾。歴史の事実を蓋をすることなく、中立な態度で語彙を選別し語義を与えることは辞書の編纂にとって重要な事であろう。このことは肯定的に捉えてよかろうが、一方で、セルビア語に属する多くの基本的な語彙 (ex. zrak (空気) に対する *ваздух*, kruh (パン) に対する *хлеб*, otok (島) に対する *острво* など) が見だし語から消えている。これらの語彙は確かに極性を持った語彙ではあるが、ことなる民族の共住する一つの言語共同体の中で長く使用され、クロアチア語の中にも慣習的に定着している基本語彙でないのだろうか。それをエントリーからははずすところにはやはり、クロアチア語はセルビア語とは異なる語彙レパートリーを持つ言語であるとする主張が含まれているように思われる。

言語の分岐を示す一層象徴的なものは、「クロアチア語とセルビア語との違い」と題された辞書の出版で、これは92年夏までにすでに3点が刊行されている⁽³²⁾。

3.3. このように、語彙や表記法の面から、造成、あるいはセルビア語との差異の拡大を計る動きは進んでいるが、こうした中にどういった問題があるかを最後に指摘しておきたい。

言葉の人為的な変革は多少なりとも社会生活に混乱を引き起こす。ここに考えられるのはコミュニケーションの停滞、混乱、既成の言語文化の否定などである。また、ザグレブ大学の Pranjković 教授が指摘したように、現在のクロアチアのように特定の語が明かに特別な意味合い (政治的意図を含めて) をもって使用される、つまりある語は「クロアチア的」であり、別の語はよりクロアチア的でない、というような見方が広まると、語の使用によって人が「敵陣営」の人間と分類され、マークされる、といった言語による差別の危険が生じる。このこと自体、コミュニケーション文化の正常な発達を妨げるものであるし、このような風潮の中では、「特定の (クロアチア的な)」語と同義的關係にあるヴァリエントが排除され、結果的に語彙レパートリー全体の貧困化が引き起こされる。

さらに、同義語の排除という現象に関連して、同義語の多くは、ニュアンスや文体的効果という意味でのみならず、造語力という点からも異なることを考える必要がある。例えば “izvještaj (報道、ニュース)” から形容詞 *izvještajan* が派生され、この形容詞は HINA (Hrvatska Izvještajna Novinska Agencija クロアチア報道新聞局) の名称にも用いられている。ところで、この元の名詞 *izvještaj* に替わって目下盛んに *izvješće* という言葉が使われてい

るが、この語に対して形容詞 *izvještajan* は派生語の関係にはならない。この例が示すように、一つの語を駆逐することは、その派生語、あるいは語の派生関係をも駆逐することになり、標準化された造語法の体系を崩してしまう危険性をもつ⁽³³⁾。

このようなクロアチア語の現状に関して、ブラニコヴィッチ教授はまた、言語に変化はつきもので、社会の変化、政治的構造の変化は言語の変化、特に語彙の変化を必然的にもたらずが、目下最大の問題は、様々な語彙、あるいは表記法の選択がある中で、それらを標準語にどう取り込んでいくかを審議する制度的な組織がない、つまりは言語計画がないことも指摘している⁽³⁴⁾。

現在進行中と見えるこうした現象が一過性のものに終わるのか、あるいは新たな、「クロアチア語」という標準語形成のプロセスの中に定着していくのか、これは今しばらく時間が経ってみないと解からない。しかしながら言語の社会機能の変化が実質の様相を変えていくことは多くの歴史的事実も示しており、クロアチアでのみならず、セルビア・クロアチア語の実体が、その社会的機能の変容と共に多かれ少なかれ旧ユーゴの各地で変化していくことは確かなように思われる。

クロアチアにおける正書法の歴史

-
- | | |
|------|--|
| 1892 | Ivan BrozのHrvatski Pravopis. 音声式正書法採用。 |
| 1918 | セルビア・クロアチア・スロヴェニア連合国家形成。
Dragutin BoranićのPravopis hrvatskog ili srpskog jezikaが正書法の手本となる。 |
| 1929 | アレクサンドル親政始まる。
「セルビア・クロアチア・スロヴェニア王国内の総ての小・中・専門学校に対する正書法の手引き Pravopisno uputstvo za sve osnovne, srednje i stručne škole Kraljevine SHS」出される。 |
| 1938 | ツヴェトコヴィッチ=マチェク政権成立。クロアチア自治州形成。 |
| 1939 | 再びBoranićのPravopisが手本とされる。 |
| 1941 | パヴェリッチ政権樹立。
クロアチア語正書法に関する大臣令。 |
| 1942 | 上令に基づき KlaićのKorijensko pisanje。 |
| 1944 | Ciple & Klaić, Hrvatski korijenski pravopis 発行。 |
| 1945 | ユーゴスラビア連邦成立。
音声式正書法に戻り、再度BoranićのPravopisが手本とされる。 |
| 1960 | ノヴィサド協定に基づく正書法辞典。 |
| 1971 | クロアチアの春。
Babić, Mogoš, Finkaのクロアチア語正書法辞典完成。
民族主義的産物として発禁(72年ロンドンで出版)。 |

- 1990 HDZ政権樹立。
1991 クロアチア独立宣言。

* この年表は1990年10月2日付けDanasならびにHrvatski korijenski pravopis (rep. 1992, Zagreb) 後書き(執筆はTežak S.)を参考に作成した。

- 注 -

- * 本論は、1992年夏までのクロアチアにおけるセルビア・クロアチア語の状況に関する研究である。
- 1 旧ユーゴが後に形成されることになるバルカンの諸地域で民衆の間で話されていた言葉、つまり現在のセルビア・クロアチア語の基盤となった諸方言(普通「何」という疑問詞の形から「シト方言、チャ方言、カイ方言と分類される)の一つ。現在の標準セルビア・クロアチア語の形成に多大な貢献を果たしたのは19世紀のセルビア人学者、ヴーク・カラジッチ Караџић, Вук (1787-1864)であるが、彼は自身がトウルシチという西ヘルツェゴヴィナの出身であったことからこの地方で一般に使用されていた新シト方言を標準語の規範として採用した。これが標準語の基盤として広く受け入れられた背景にはこの新シト方言がセルビア・クロアチア語使用地域の多くですでにコイナー(koinē 民衆の共通口話体)となっていたことがある。なお、クロアチアにおける言語の標準化に関して、1830年から40年代にかけてのイリリア運動とその指導者ガイGaj, Ljudevit (1809-1872)の活動が指摘される。時に見られる記述では、この時期にガイとその協力者がヴークの業績を取り入れてクロアチア語を規範化し、今日ある姿の標準セルビア・クロアチア語の形成に貢献したように受け取られるが、標準語の形成に関するかぎりガイとイリリア運動の貢献は標準語の必要性を喚起したという象徴的な面が大きいように思われる。マジュラニッチMažuranić, I. (1814-1890)、ヴークらの1850年のいわゆるウィーン協定も標準セルビア・クロアチア語の形成に寄与するような結果を直接はもたらさなかった。もちろんガイやイリリア運動の功績は無視できないが、標準語の形成自体は段階的に進められたこと、つまり先に示したようにすでに17世紀頃から新シト方言がコイナーとして機能していたという前史、さらに19世紀半ばの運動をへて19世紀末のMaretićの文法、Brozの正書法など、所謂「ザグレブのヴーク派」の業績によって文法、正書法が整ったことを理解する必要がある。クロアチアにおける標準語の形成については例えば1. Babić, Brozović, Moguš et al., *Povjesni pregled, glasovi i oblici hrvatskoga književnog jezika*, Zagreb, 1991, pp. 42-58 (記述はMoguš)。2. Katičić, R., *Novi jezikoslovnici ogledi*, Zagreb, Školska knjiga, 1986, pp. 138-156。
- 2 言語の変異体(variantあるいはvariety)は社会言語学で好んで用いられる概念だが、その定義は必ずしも一定してはいない。「言語の任意の種類例えば方言dialect, アクセントaccent, 社会的方言sociolect, スタイルstyleなどに言及する中立的な用語」(Trudgill, P.,

Introducing language and society, Penguin English, 1992, p. 77)という説明はこの用語の適用をわかりやすく示している。言語学全体の中で変異体あるいは変異型といえ、ある言語体系の中の特定の項目について抽象的に設定される普遍体invariantに対し、個別的なケースにおいて実現される形式あるいはその集合体と規定されよう(例えば音素を普遍体としたときの実際の音声的实现が変異体となる)。この考えを言語全体にあてはめれば、言語における変異体とは、抽象的総体としての言語に対し、ある地域的あるいは社会的結びつきによってまとめられるグループの人々に共通する言語の実現形と捉えることができる。この関係を個人レベルにまで適応させれば個人言語idiolectは最小単位の言語の変異体ということになる。方言dialectは、一つの言語の中の下位グループ、ある特定地域あるいは特定社会集団に共通する特徴を有した言語の実現パターンであるから、その本来の意味で「この言語の標準語となっているのはA地方の方言である」という言い方は適切なものと言える。一方、方言という用語はしばしば、標準語と対置される「非標準語」あるいは特定地域の標準語以外の言語の変異体の意味で使用される。また、フランスにおける伝統のように、標準語以外の地域言語の意味で方言un dialecteを用い、さらにこれと区別して俚語patois(方言より狭い地域で用いられる「文学的伝統をもたない」民衆語)という概念が用いられる例もある。そこでこうした混乱を避けるために変異体という用語が好んで使用される。本論でもこれにならい、変異体という用語を用いる。

- 3 多極的言語の端的な例としてセルビア・クロアチア語を指摘したのはKloss, H., "Abstand Languages' and 'Ausbau Languages'," *Anthropological Linguistics*, Vol. 9, No. 7, 1967, p. 31. が、これによれば多極的言語という言葉はWilliam A. Stewartによって示されたという。このStewartの論文が何であるか論者は未確認。
- 4 Bugarski, R., "Soziolinguistische Aspekte der heutigen serbokroatischen Standardsprache," *Die Welt der Slaven*, 1989, XXXIV, Heft 2, p. 60.
- 5 特にボスニア・ヘルツェゴビナの言語状況は注目に値しよう。この地域のセルビア・クロアチア語は、トルコ語の影響を語彙の上に多く残しつつ、セルビア、クロアチア双方の言語的、文化的影響が混合する中で言語文化を築いてきた。こうした実情を踏まえればこの地域の言語を一つの変異体と認めることは妥当であろう。また、今日の社会状況を考えるならクロアチアにおいてと同様、この地域において言語の独自性(例えば「ボスニア・ヘルツェゴビナ語」という名称を持った)が主張されることは十分考えられる。
- 6 Kloss, *op. cit.*, p31.
- 7 Peco, A., *Pregled srpskohrvatskih dijalekata*, Beograd, 1985, p. 15, p. 59.
- 8 標準セルビア・クロアチア語では語末のlがoに交替することが多い: ex. posao(<*pos(a)l 仕事。生格はposla), so(<sol 塩)。これは総ての場合には当て嵌まらない(ex. glagol 動詞, val 波)が、完了分詞男性単数の-lは必ずoに交替する。
- 9 Дмитриева, П. А., "Некоторые особенности функционирования вариантной лексики сербохорватского / хорватосербского литературного языка в периодической печати СР Сербии и СР Хорватии," в: Смирнов, Л. Н. (ред.), Функционирование

- славянских литературных языков в социалистическом обществе, М., Наука, 1988, стр. 225-255.
- 10 こうした二重語が生じた主たる理由は、これらの語を受け入れた時期や経路がセルビアとクロアチアで異なっていたこと、セルビア・クロアチア語コイネーの異なる方言からそれぞれの標準語に取り入れられたこと、などが考えられている。これについては例えば Дмитриева, *op. cit.*, стр. 240.
 - 11 余談めくが、92年3月、トウジマン大統領自身がTVの記者会見で“...tačno”と言ってから“...točno”と言い直したのを論者はザグレブで見た。
 - 12 Дмитриева, *op. cit.*, стр. 240-250.
 - 13 Kloss, *op. cit.*, p. 38.
 - 14 社会言語学では言語の席次(ステータス)つまり言語の社会的役割を問題とする場合、公的席次official statusと実質的席次actual statusを区別すべきことが指摘される。日本における日本語はこの二つの席次の一致する例であろうが、旧ユーゴのように、公式には総ての連邦の諸民族の言語は平等であると言われながら実質的にはセルビア・クロアチア語が他の言語にたいし高い席次を得ていたケースは両者の一致しない例と言える。公的席次と実質的席次についてはŠvejc, A. D., *Contemporary sociolinguistics. Theory, problems, methods*, Linguistic & Literary studies in Eastern Europe, vol. 15, Amsterdam-Philadelphia, 1986, pp. 132-133.
 - 15 こうしたセルビア語の社会的機能に関しては例えばRadovanović, M., *Sociolingvistika*, Novi Sad, 1986, pp. 202-203. ただしRadovanovićはセルビア・クロアチア語全体の役割を他の言語との対比で考察している。また、本論ではセルビア・クロアチア語の役割をリンガ・フランカ(通商語)としたが、Radovanovićはセルビア・クロアチア語はリンガ・コムニス(共通語lingua communis)だとしている。
 - 16 ロシア語のлитературный язык についてはЛингвистический энциклопедический словарь, Советская энциклопедия, 1990. 英語のliterary language について例えば Stewart は、論文“Outline of linguistic typology for describing multilingualism,” (1962)の中で、言語がどういった分野で使用されるかという社会機能に着目し、その分類(ex. 公用語official language、宗教語religious language、教育の言語educational languageなど)のなかで、文芸、学術のための言語と位置づけているという。Stewartの論文は論者未見。Švejc, *op. cit.* p. 127より引用。
 - 17 Peco, A., “Književni jezik, standardni jezik i narodni govori,” in: *Književni jezik i narodni govori*, Sarajevo, 1990, pp. 8-9.
 - 18 *Enciklopedija Jugoslavije* (2ed.), Zagreb, Leksikografski zavod, vol. 7, “Jugoslavija”の項, p. 242.
 - 19 Vaupotić, M., *Hrvatski tjednik*, No. 13, 09.07.1971. この部分はCuvalo, A., *The Croatian National Movement 1966-1972*, East European monographs, Columbia Univ. Press, 1990, pp. 105-106. より引用。
 - 20 Gotovac, V., *Danas*, 17.12.1991, p. 30

- 21 1992年3月半ば、ザグレブでは宣言から25年を記念して政権寄りのジャーナリズムや一部学者が中心となって「クロアチア語週間」を記念する催しが開かれた。また、クロアチア民主同盟HDZの発行する週刊誌Glasnik 97号(3月16日付け)には宣言の全文とコメント記事(Brozovićが執筆)が掲載されている。
- 22 Petranović, B., *Istorija Jugoslavije 1918-1988*, Beograd, Nolit, 1988, III, p. 389.
- 23 Škiljan, D., *Jezična politika*, Zagreb, Naprijed, 1988, pp. 119-120.
- 24 それぞれ Anić, V. & J. Silić, *Pravopisni priručnik hrvatskoga ili srpskoga jezika*, Zagreb, Školska Knjiga; Babić, S., *Tvorba riječi u hrvatskom književnom jeziku*, JAZU, Zagreb, Globus; Katičić, R., *Sintaksa hrvatskoga književnog jezika*, JAZU, Zagreb, Globus.
- 25 例えば、P. Majorevićはクロアチアの言語政策を、19世紀以来一貫してクロアチアがとってきた段階的な言語民族主義的計画であり、その目指すところはクロアチア内のセルビア人のクロアチア化だと非難する。つまりまず言語的にセルビア人をクロアチア化し、ついで言語上の基準(「クロアチア語を話すものはクロアチア人である」)を宗教的なそれにすり替えることによって宗教的にも同化し、クロアチア外のセルビア人と切り離すことによって最終的にセルビア人としてのアイデンティティーを奪いクロアチア化するのだ、と主張する。P. Majorević, *НИН*, 24, март. 1989, pp. 34-35.
- 26 Zaključci novosadskog dogovora, 1および2. これはノヴィサド協定に基づいて作られた正書法辞典 *Правопис српско хрватскога књижевног језика*, Нови Сад - Zagreb, 1960の巻頭に記されている。
- 27 Kloss, *op. cit.* なお造成Ausbau, 隔絶Abstandの訳語は田中克彦『言葉と国家』岩波新書、1981年、162頁を借用した。
- 28 Haugen, "Dialect, Language, Nation," In: *The Ecology of Language*, Stanford, California, 1972, pp. 249-251. 訳語はクルマス、山下公子訳『言語と国家』岩波書店、1987年、83頁以下による。なお、ここでの「造成 elaboration」は、クロスのAusbauに該当するとハウゲンはしている。Haugenが言及したファーガソンの分析はFerguson, "The language factor in national development," *Anthropological Linguistics*, 1962, 4, pp. 23-27.
- 29 Enciklopedija Jugoslavijeは‘音韻式正書法fonološki pravopis’としているがここではfonetski pravopisを音声式正書法と訳しこれを用いる。
- 30 この主張の代表者はたとえばDr. S. Težakであろう。博士の立場はCipra, F., Klaić, A. B., *Hrvatski Korijenski Pravopis*, Zagreb, 1944. (rep.) Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1992. の後書きに現われている。
- 31 *Danas*, 10.12.1991, p. 52.
- 32 一つはLukačić, D. & I. B. Šamija, *Razlika izme ∞ u hrvatskog i srpskog jezika*, MAX print, Zagreb, 1991、今一つはBrodnjak, V., *Razlikovni rječnik srpskog i hrvatskog jezika*, Zagreb, Školske novine, 1991で、後者にその縮小版としてKlarić, I. (red.), *Rječnik razlika izme ∞ u hrvatskoga i srpskoga jezika*, Školske novine, Zagreb, 1992が

ある。

Lukačić-Šamijaの辞書(総見だし語数4000、140頁程度のものではあるが)は専門家の立場からすればほとんど問題にならない産物で、ザグレブ大学教授で現代クロアチア語の専門家であるプラニコヴィッチDr. I. Pranjković教授は、92年1月7日付け*Danas*で「エセ言語学的産物」と酷評している。教授の指摘によれば、ことさらにセルビア語との違いを強調しようとする意図の下に、この辞書ではアルカイズムやNDH時代の醜悪な新造語、あるいは標準語ではない方言を引用したり、奇妙な「クロアチア語」を捏造しているという(例えばturiŝtがodmoridbenik; laboratorijaがpokusionicaなど。)教授は「これは全く、滑稽な、しかし危険な代物であり、このような辞書を作る著者の気も知れないが、このようなものの出版を許可した教育文化省の態度も理解できない」としている。

一方のBrodnjakのRazlikovni rječnikは見出し語彙に対し、「元来セルビア語ではあるがクロアチアにおいても慣習的に定着している要素」「クロアチア語に適切な対応の語彙がなかったためにクロアチア語にも取り入れられたセルビア語」「『民族主義的』『ウスタシャ的』などとして否定されてきたクロアチア語」など細かい注記を設けて説明している。

クロアチア語とセルビアの差異を強調する傾向と言えば第二次大戦前のベネシッチ Benešić, J. のクロアチア-セルビア語文法*Grammatyka język chorwatskiego czyli serbskiego*, Warsaw, 1939や、グベリナとクルスティッチGuberina, R & K. Krstićのクロアチア語とセルビア語の違い辞典*Razlike između hrvatskoga i srpskoga književnog jezika*, 1940. がある。これらは論者未見であるが、上掲のBrodnjakの辞典ではセルビア語彙とクロアチア語彙との区別の基準にベネシッチの文法書の記述を参照していることが示されている。

戦前のクロアチア語の分離的傾向についてはBanac, I., “Main trends in the Croat language question,” Picchio & Goldblatt (eds.), *Aspects of the slavic language question*, Yale Russian and East European Publications, No. 4, vol. 1, 1984, pp. 241-245.

33 *Danas*, 24.09.1992, pp. 60-61.

34 *Danas*, *ibid.*

参考文献

Anić, V., “Zur standardsprachlichen Problematik der heutigen Serbokroatischen (Kroatischen oder Serbischen) Sprache,” *Die Welt der Slaven*, 1990, XXXV, 2, pp. 361-369.

Babić, Brozović, Moguš, Pavešić, Škarić, Težak (eds.), *Povjesni pregled, glasovi i oblici hrvatskoga književnog jezika*, Zagreb, 1991.

Banac, I., “Main trends in the Croat language question,” Picchio & Goldblatt (eds.) *Aspects of the slavic language question*, Yale Russian and East European Publications, No.4, vol. 1, 1984, pp. 189-259.

- Brodnjak, V., *Rječnik razlika izme ∞ u hrvatskoj i srpskoj jeziku*, Zagreb, Školske novine, 1992.
- Burgarski, R., "Soziolinguistische Aspekte der Heutigen Serbokroatischen Standardsprache," *Die Welt der Slaven*, 1989, XXXIV, 2, pp. 259-273.
- Cuvalo, A., *The Croatian National Movement. 1966-1972*, East European Monographs, Columbia Univ. Press, 1990.
- Enciklopedija Jugoslavije*, Zagreb, Hrvatski leksikografski zavod, 1988.
- Haugen, E., "Dialect, Language, Nation," *American Anthropologist*, No. 68, 1966, pp. 922-935. (再録) Haugen, E., *The ecology of Language*, Stanford, California, Stanford University Press, 1972, pp. 237-254.
- Katičić R., *Novi jezikoslovni ogledi*, Zagreb, Školska knjiga, 1986.
- Klaić, A. B. & F. Cipra, *Hrvatski pravopis*, 1944. (rep.) *Hrvatski korijenski pravopis*, Zagreb, Hrvatska Sveučilišna naklada, 1992.
- Kloss, H., "'Abstand Languages' and 'Ausbau Languages'," *Anthropological Linguistics*, 1967, Vol. 9.No.7, pp. 29-41.
- Peco, A., "Književni jezik, standardni jezik i narodni govori," *Književnost i jezik*, Beograd, 1977, No. 1, pp. 131-136. (再録) *Književni jezik i narodni govori*, Sarajevo-Ljubljana, 1990, pp. 7-10.
- Peco, A., *Pregled srpskohrvatskih dijalekata*, Beograd, Naučna knjiga, 1985.
- Petranović, B., *Istorija Jugoslavije 1918-1988*, Beograd, Nolit, 1988.
- Radovanović, M., *Sociolingvistika*, Novi Sad, Dnevnik, 1986.
- Škiljan, D., *Jezična politika*, Zagreb, Naprijed, 1988.
- Švejcser, A.D., *Contemporary Sociolinguistics. Theory, problems, methods*, Linguistics & Literary studies in eastern europe, Amsterdam / Philadelphia, 1986.
- Trudgill, P., *Introducing language and society*, Penguin english linguistics, 1992.
- Wardhaugh, R., *An introduction to sociolinguistics*, Blackwell, 1986 (3.ed) 1989.
- Дмитриева, П. А., "Некоторые особенности функционирования вариантной лексики сербохорватского / хорватосербского литературного языка в периодической печати СР Сербии и СР Хорватии," в: Смирнов (ред.), Функционирование славянских литературных языков в социалистическом обществе, АН СССР, М., Наука, 1988, стр. 225-255.
- Ярцева (гл. ред.), Лингвистический энциклопедический словарь, М., Советская энциклопедия, 1990.
- クルマス、山下公子訳『言語と国家』岩波書店、1987年。
- 田中克彦『ことばと国家』岩波新書、1981年。

The current Croatian language question.

Keiko MITANI

We often have trouble in deciding whether what a particular group of people speaks should be called a *language* or a *variety* of a language. One can draw boundaries not on the basis of the linguistic features alone, because attitudes of speakers and social structure in which a language functions also matter. There are cases in which two or more varieties of the same language are recognized as separate languages just for political reasons.

The present Serbo-Croatian situation provides a good example to show how such nonlinguistic factors as political circumstances and social structure influence linguistic items and social functions attached to language. The collapse of Yugoslavia and the rise of new states have changed and are changing various aspects of language. In this paper I have examined recent Croatian language situation in the sociolinguistic context and studied how much a language (especially a standard language) is subject to social influences.

This paper falls into three sections: 1. To indicate linguistic features of Croatian, a variety of what sociolinguists call “polycentric” standard Serbo-Croatian, in contrast with Serbian variety; 2. To review recent history of conflict between Croatia and Serbia on language problems; 3. To examine changes in certain linguistic items and interpret current problems on language in Croatia.

Standard Serbo-Croatian language has been regarded as a “polycentric language,” a single language that consists of a set of standard varieties. By the definition of Kloss on a language and a variety, existence of varieties does not prevent us treating them as a single language, for difference between them have little or nothing to do with the corpus of the language. As is indicated in the first section of my paper, difference between Croatian and Serbian varieties, such as pronunciation of *ije* and *e* (<*ě), usage of infinitive in particular sentence structure and variations in small number of lexical items, might be called ‘subtle’ from the linguistic viewpoint.

Here a question arises: why have such varieties with slight differences been left as varieties, why has a single standard Serbo-Croatian not been established? To answer this question, we must study the history of Serbo-Croatian.

There have been continuous efforts of the intellect of Serbia and other Serbo-Croatian speaking areas to establish common norm of their language since 19 century. These efforts were successful in the sense that they realized formation of a language with one phonological system, one normative grammar and common orthography.

It is not to be forgotten, on the other side, that there has been always a tendency in Croatia to resist standardization or unification of varieties into one form, a single Serbo-Croatian standard language.

Demands to use the name 'Croatian literary language' and attempts to make Croatian variety a separate standard language among a group of Croatian intellect originated in historical, cultural and regional tradition, i.e., ethnopsychological aspects.

The postwar Yugoslav federalism tried to solve language dilemmas under the principle of national equality. The Novi Sad Agreement was an attempt to reconcile both linguistic 'unitarism' and 'separatism'. It reaffirmed the equality of two varieties, Serbian and Croatian but stressed that "the popular language of the Serbs, Croats, and Montenegrins is a single language." The Novi Sad Agreement and a new orthography appeared in 1960 were denounced from Croatian side. For those who insist on Croat-Serb linguistic differences all attempts to establish a standard language meant destruction of Croatian national identity, linguistic inequality and unitarism that favors federal and Serb political leadership.

The most symbolic resistance to linguistic 'unitarism' was the "Declaration on the Name and Position of Croatian Literary Language" issued by Matica Hrvatska in 1967. The declaration was supported by the Croat political leadership and the struggle against linguistic unitarism was, by the words of Banac, "moved onto political terrain."

Language problems in ex-Yugoslavia were indeed political ones. Serbo-Croatian linguistic questions have been always associated with political and economic conflict between the Serbs and the Croats. It should not be overlooked that this 'politicized' language situation has obstructed normal development of language culture in Serbo-Croatian speaking areas.

It is common knowledge that any social change affects a language spoken in that society in positive or negative way. It often happens that when a new political framework is established, as sociolinguist Wardhaugh points out, the government involves himself in the standardization process to regulate language matters or to encourage changes that are felt to be desirable.

Since its declaration of independence, Croatian government seems to have challenged the Serbo-Croatian language standard. The established tradition of common language culture is threatened. Differences of Croatian and other varieties, especially Serbian variety are not only stressed, but also enlarged. Lexical items that are specially felt to be Serbian are likely to be eliminated from the standard lexical repertoire of Croatian. Some people in political power are considering modifying orthography seriously.

It may be still open to question whether a language called "Serbo-Croatian" does not exist any more, falling into several quite similar but discrete languages. We can say for the time that social settings around this language have completely changed. It means that the language itself will never be left unchanged.